



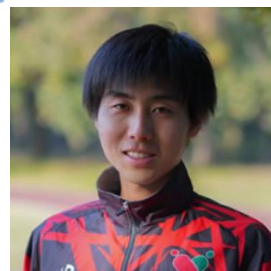
和 ～心をつなぐ～

令和5年1月26日
第7号

走り続けたその先に

和光中学校では、毎月「道徳の日」に、さまざまな人の生き方や社会情勢について話を聞き、自分自身の心と向き合いじっくり考える時間をもっています。1月は、数々の挫折を経験しながらも、100キロ世界選手権(マラソン)で優勝した陸上選手・岡山春紀さんの話から学びました。

何人かの感想を紹介します。



☆ 1年生 ☆

○27歳という若さで世界大会一位になったのはとてもすごいと思いました。気持ちを切り替えることが大切だと分かったので、僕も岡山選手のように気持ちを切り替えられる人になりたいです。

○今度、習い事で大会があります。他の団体は強いチームが多く、私は体調が悪くて練習に参加できない時期があったのであきらめかけていました。でも、岡山選手の話聞いて、賞は取れなくてもいいから、最後まであきらめずに頑張ろうと思いました。

☆ 2年生 ☆

○世界で一位をとることは努力のかたまりなんだと思いました。私は部活をしていて、あきらめたことが何度もあります。でも、誰に何を言われようと、自分で限界を決めず、自分が目標にしていることを絶対に達成したいです。そして、悔しい経験をバネに頑張ります。

○ある人に、「人生は長距離走です」と言われたことがあります。どこかで折れてもまた走り続けられる、それはまだ先があるからだと思いました。走り続けたその先だけでしか見られない景色もあるんだと分かりました。自分も、これからも全力で走り続けたいです。

☆ 3年生 ☆

○ケガに悩み、陸上部に見放されてもなお、好きなことのために努力できるってすごいなと思いました。好きなことに一生懸命になれる人でありたいと強く感じました。何事も粘り強く、あきらめないでやり続けるということが目標を達成するための第一歩だと思いました。私もこれから入試本番が近い中、そういう気持ちを持ちたいです。

○社員として毎日8時間働く中でずっとトレーニングをやめないのは、想像もできないほど大変だったと思います。努力しても必ず報われるわけではないけど、ずっとあきらめず前を向いて走り続けたことが結果につながったのだと思います。

○自分がしたいこと、やりたいことをあきらめずに全力でやり切ると、自分の道が開けてくるのだと分かりました。僕もしたいこと、やりたいことを、自分が納得するまで頑張りたいです。

岡山選手は幼い頃から走ることが好きで、中学校で陸上部に入部しました。走るのが速かったため、地元熊本県の駅伝強豪校にぜひ来てほしいと言われ、入学しました。しかし、高校に入ってからケガなどの故障が多く、走ることがほとんどできませんでした。希望する大学にスポーツ推せんで入学しようと思ったけれど、推せん入学で合格をもらうのに必要なタイムが出せず、結局、一般試験を受けて合格しました。

入学した時も故障中だったため、普通に部活動ができたのは、2年生になってからでした。2年生でありながら、一つ年下の1年生と一緒に活動しながら、結局、正式入部に必要なタイムが出せずに陸上部をクビになります。普通は、ここであきらめるところですが、岡山選手はあきらめませんでした。後に、当時を振り返り、次のように語りました。

「本当に悔しかったですね。でも、悔やんでも仕方ない。気持ちを切り替えて、『陸上部の選手には負けない』『見返してやる、絶対に勝ってやる』という気持ちで練習しました。その時、自分はチームで練習するとケガをしてしまう傾向があるから、一人で、自分のペースでやってみようかと決断したんです。」

陸上部を去った岡山選手は、自ら考えたトレーニングをするようになりました。参考にしたのが、当時「公務員ランナー」として活躍していた川内優輝選手のトレーニング方法でした。そして、練習内容を見直して練習した結果、高校や大学時代には出せなかった記録を出すことができました。

その後、一人の市民ランナーとなった岡山選手は、箱根駅伝などの有名な大会を目指す同年代の選手とは全く異なるトレーニングを続けました。そのうち、数々の大会で優勝したものの、社会人チームに入ってほしいという声は一切かかりませんでした。自分から連絡を取ってみても、強いチームには全く相手にされない日々が続きました。それでも岡山選手はあきらめず、駅伝部があるスーパーに、選手としてではなく一般社員として入社します。ランナーとしての実力を認められて入社した選手であれば、仕事大幅に免除され、その分たくさん練習ができます。しかし、岡山選手は一般部員扱い。スーパーの店員として毎日8時間働きながら、早朝仕事へ行く前に一人で黙々と練習する日々が続きました。限界を感じながらも、ついに2020年のフルマラソンでチーム新記録を樹立し、強化選手に昇格します。その結果十分な練習時間を確保できるようになりました。そして、往復100キロを走るウルトラマラソンに初出場し、大会新記録で優勝して世界選手権出場への切符をつかみます。そして、ついにあのあこがれの川内選手と出会います。

「川内さんから『岡山くん、すごい。素質あるね。』と言われて、自分は100キロに向いているんだと思いました。」

世界選手権本番では、途中でスポーツ用のネックレスが外れ、その破片が右のシューズに入りました。それでも、そのまま走り抜けました。残り20キロのところで両脚の筋肉がつりそうになりましたが、脚をあまり上げないようにして走り続けました。そして見事優勝。かつての大学時代の同級生は、箱根駅伝の予選で消えました。結局現在も陸上競技を続けているのは岡山選手だけです。箱根駅伝で長年勝利してきたチームから『いらない』と言われた男が、世界選手権の金メダリストになったのです。後に、岡山選手は語りました。

「ゴールした後は涙が止まらなかった。色々ありましたけど、悔しい経験があったからこそ、世界一になれたのかなと思います。競技を続けてきてよかった。夢を追ってきて、本当によかったと思います。とにかくあきらめないことが大事だと僕は実感しています。もうやめようかなと思った時に結果が出ましたから。挫折しても好きで続けていけば、自分の想像を超える道が開けてくるんです。」

☆ 保護者の方からの感想 ☆ 12月「ウズベキスタンに咲いた花」

- ・強制されて作られる物であっても勤勉に実直に心を込めて仕事に取り組む姿に、現地の人達も感銘を受けたのだと思います。私たちは日本という尊いふるさとをもっています。それを自覚し、もう一度この国の良さを見直し、日本人としての誇りについて考えてみたいと思いました。
- ・日本人の「他国のためにコツコツ働ける精神」を子どもたちにも学んでほしいです。
- ・戦争の話聞く度に、「日本人」としての在り方について考えさせられます。そして、「日本人」としての誇りをもって生きていくことの大切さを改めて感じます。子どもたちにはそのことを知ってほしいと思います。